

大森聖アグネス教会は、竹内司祭の月二回の司式・説教の機会を与えられ、恵み多い教会生活を送らせていただいております。

「馬込便り」編集グループではこの貴重な「縁を大切にし、竹内司祭にシリーズで原稿をお願いしました。

最初の二回は「キリスト教会の礼拝・キリスト教会とは何か」ということについてお届けしたいと思っております。



世界にはたくさん「宗教」と呼ばれる人間の営みが存在します。それらは人が人となっていく過程で、変化し発展しました。それはまた、次第に見えるものに対する人の思いを越えて、人の世界と環境においては、目に見えないものが存在するという知覚へと発展していきました。

「宗教」と呼ばれる営みは、まさにこのような、見えない、五感において感じ取れない「存在」へ肉薄しようとする人の営みに他な

りません。それは太古の昔からさまざまな人の実体験を通して重ねてきた人の経験によっても推し進められてきた営みでもありました。人はその営みの中で、次第に「意識する」という心の働き(或いは精神的、心理的行為)を自覚する段階に到達します。それは同時に自己の存在そのものが、単なる物理的な、或いは生理的な事柄ではなく、時には自己理解を越えた性質のものであるという理解が生じてきたということでもあります。

世界は人自身の行動によつて左右されるのではない領域が厳然と存在することの理解です。それは人の誕生と死、そして人の思いを「感じる」というときには人の理解を遙かに越える状況、たとえば、自然現象のような状況と直面させられる現実によつて促進させられるようなものでしょう。

■ キリスト教会の礼拝 ■

司祭 バルトロマイ 竹内謙太郎

『キリスト教会とは何か ①』

人はそのような人の存在の様態が目に見えないものによつて支配されていると感じるようになるのです。特にそれは「死」という現実が強く悟らせるものでした。そして「死」は、人にとつてその現実の対極に、生きることが有ることに気付かせます。同時に生きることの重要さとともに、ここにも目に見えない存在が生きていることを可能と

していること、また死をもたらしものであることにも気付くのでした。

人は、こうして、目に見えるものと共に、或いはそれら以上に、目に見えないものの存在を強く感じるようになります。そしてその故に生きることの大きな意味に対しても強い意識を向けるようになったのです。

人が「生きていく」ためにしなければならぬさまざまな「生きずべ」に立ち向かっていくとき

に、人は多様な体験を避けて通ることはできなかつたのです。食べる、という行為は特に重要でした。



そして食べるために人がしなければならぬ多様な行為は、食べられるものを発見しようとする働き、食べるために必要な準備などが、人に食べることが人として生きることの象徴的な意味を示すことに気付きました。さらに、食べるという行為、食べるために必要なものを用意し、食べる準備をする行為などのすべてが、多くの私たちの協働の行為によつて成り立つことを知るようになるのにそれほど長い時間を必要としませんでした。

食べる行為を共にする人の集団の中に存在する自己とその位置付けと立ち位置を人は次第に自己の生と死の課題とすることを学びます。人にとつて生も死も、複数の

人の形成する集団の課題であると同時に、すべてを覆っている目に見えない存在を身近に捉える問題でした。人の力を遥かに越えた存在を、です。

このようにして、人はさらに重要な理解に到達します。それは、人のすべての体験は、決して個々

別々のものだけにとどまらず、すべての人にとって共通の形態や条件があることを知りません。

生と死は、まさにその最も根源的な状況です。すべての人は個々別々に生を受け、そして死に向かいます。しかし、その生と死は、全ての人に必ず起る普遍的な事実です。

人の存在の根底にあるこの普遍的な状況、人の存在の普遍性が、その秘められた状況において、「目に見えないもの」の存在を確かに



確認させるものでした。

特に、人にとって次第に理解されるようになった現実とは、現実として見えてきた「普遍性」でした。「目に見えないもの」の本質に普遍性があることに気づいたということ。人であれば誰にとっても真実であるという

「もの」があることを理解し始めました。

そしてその「普遍的であるが故に見えない」というものが人の生と死という存在の根底に関わることも感じ取り、理解できるようにになりました。

個別性の豊かな人の姿の背後に、すべてを透徹する普遍的な存在が厳然として在ることを認めることになりました。

聖書の民は、この理解をもつて、すべての人の生と死に関わる根源的な存在、彼らが神と呼ぶものの存在を感じ取りました。人の生と死を目前にする人は、それらの生

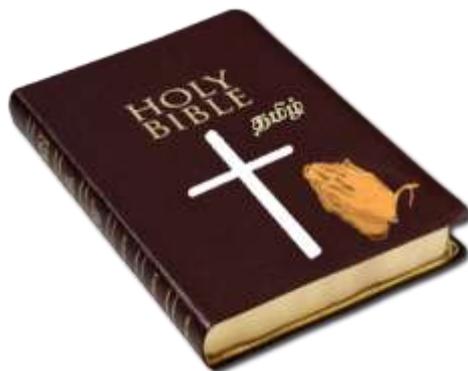


と死が自己のものであることも知りました。普遍性を具体的に感じ、理解することになったのです。

このようにして、人の生と死がすべての人に普遍的に起こり、存在する事実であるとの理解は、生と死という人の体験がすべての人に全く同じく起こることを教えました。

子の誕生、親の死は自己自身に生起するはずの事実でもあるのです。あらゆる世代に、あらゆる時間的経過において、これは事実です。普遍性という現実が時間的にも同様であると知りました。人はその現実を永遠と呼びます。

ここから、人は普遍性と永遠性という時空を越えた現実、あらゆる限界を超える現実に直面します。聖書の民が神と呼んだ存在においてこの普遍性と永遠性は明白な事実であり、実はその神という存在こそが人が体験する普遍性と永遠性の根拠であることに気付くのです。



人はこの世界が多様な限界によって支配されていると同時に、人が直面する現実とは、実は限界を遥かに越え、無限とも言ふべき現実と結びついていると理解するようになりました。限界からの解放です。(次号へつづく)